

沼津市明治史料館通信

二〇一九年一月

通巻136号

- ぬまづ近代史点描 81
駿州赤心隊と原宿の庄司平五郎
- 史料館からのお知らせ

静寛院宮(島田家)蔵

是為 二品内親王和宮作書牘之圖景也島田君使畫人池田輝方寫之而達寄我以表題意嗚呼君之意我知之矣故不敢辭而書之曰謹將 和宮請親子 仁孝帝第二女 孝明帝李妹而 德川大將軍昭徳公夫人也年十六 孝明帝登極之幕府明年成婚關雎之和内外悅服然方是時國家多事 公多在京畿會獲疾而薨時 宮年二十一無子今 德川老公在京親家是歲 孝明帝崩 明治帝踐祚未一歲國勢艱危無有伏見之憂 公東還見 宮以請為復 朝廷 宮深憂德川氏之存亡如何乃自裁書致諸朝廷及外家以救其急幸致輝輝理明白字 莫不血淚馬先走朝廷矣 問罪之師大轟至駿府 宮又遣書大進督府請暫駐軍於其地待東都人心略定而進時朝廷遂命 宮以西歸遊難而 宮莫不取聽天曰德川氏而不再造幸有一死以謝先公於地下耳既而朝廷命大能督府發身使以收束郡城池又慶德川氏 卒從 宮之所請為於是 宮始西歸謝恩固以居焉遂都復後移東京明治十年病篤行年三十二嗚呼 宮於神運無所虧 而何其命之薄也然當大難之時以蒲柳之身存夫家於己之故大郡并將陷是特德川氏之奇也哉 皇堂之光華矣但其位 復書信皆屬內事故世者知其書尚存今人讀而思之足以察其苦心矣方今婦女子幼而入小學長更修高上之學衆 藝無不諳然一旦遭家之不寧其於操行即義未無操焉也島田君之作此圖其意欲警醒之耶抑欲與夫書牘並傳以補史之 闕支耶二者其闕世教也大矣做令君之志在其一當相通而無偏也猶恐吾未及筆力不足發揚 宮之美德况爾本館之 有限不過叙其梗概耳 大正元年寒露節 畫臣中根謙書於岳陽興津偏屬



輝方印

静寛院宮作書牘圖 (複製印刷) 当館蔵

孝明天皇の妹で14代將軍徳川家茂の夫人、静寛院宮(和宮親子内親王)の肖像画。旧幕臣・沼津兵学校出身の政治家島田三郎が、画家池田輝方に描かせ、大正元年(1912)、興津に住んでいた沼津兵学校時代の恩師中根淑(香亭)に讀を記してもらったもの。島田は和宮を尊敬しており、ある日やって来た画家に「何か描かせて下さい」と言われた際、これを描かせ、額にして東京番町の自宅に掲げていたという(中島国彦「速記で残された木下尚江の島田三郎追悼演説」『国文学研究』第170巻、2013年、早稲田大学国文学会)。モノクロの写真は、雑誌『江戸』第3巻第1綴(1916年、江戸旧事采訪会)の口絵に掲載されたことがあった。中根の讀は同誌に翻刻・掲載。カラー印刷の本資料は中根の遺品であり、何か別の刊行物の一部と考えられるが、単品で残されていたため誌名などは不明。

(樋口雄彦)

神官たちの駿州赤心隊

鳥羽・伏見の戦いによって始まった戊辰戦争下、「官軍」に協力すべく各地で民間有志が、藩や領主とは別に自主的に結成した部隊が草莽隊である。遠江国では報国隊、駿河国では赤心隊が、神道による復古を歓迎する神官たちによって組織された。駿州赤心隊の誕生は慶応四年（一八六八）二月であり、さらにその支隊として駿東郡下の神官らによって駿東赤心隊も結成された。もちろん沼津とその周辺の神官たちは駿東赤心隊に結集したが、唯一、岡宮村浅間神社の植松伊織（三好維堅）のように本隊・支隊両方に属した者もいた。

ところが、沼津市域にもう一人、本隊である駿州赤心隊に参加した者がいた。それが駿東郡原宿の商人庄司平五郎である。赤心隊の隊員名簿では、大宮浅間神社（現富士宮市）の大宮司富士亦八郎（重本）率いる大宮組の一員であり、米ノ宮浅間神社（現富士市本市場）の神官錦織伊予や同社鍵取原右近の後に列記された一〇名の中にその名があったため、他の九名（望月隼人・塩坂源右衛門・望月力太郎・笠井恭蔵・渡辺利左衛門・下村国太郎・島田紋兵衛・佐野新蔵・三好八郎右衛門）とともに米ノ宮浅間神社の鍵取であるとみなされてきた。従って、筆者も隊員名簿にある庄司平五郎は富士郡の人であり、原宿の商人とは同名異人であると思っていた。ところがそうではなかった。鍵取の肩書は原右近だけに付くものであり、その後にくく人名には肩書がないとするのが正しい見方だったのである。

銚是登の手紙

沼津市明治史料館が所蔵する庄司家文書の中に、「原宿庄司平五郎様」宛の銚是登の書簡一通があった。日付は「十月廿二日」であり、年は記されていないが明治元年である。資料を整理し目録を作成した際には、包紙に記された「赤心隊」という文字を見落としていたほか、「銚是」の姓も「銚尾」と誤読していた。江戸・東京へ出征した赤心隊の銚是登が国許に残った庄司に送った手紙だったのである。以下、全文を掲載してみる。

（包紙）「駿州富士郡原宿庄司平五郎様 要用

平安 同国大宮銚是登」

（包紙裏）「□□神無月廿二日認メ出ス 東京

府西丸下赤心隊左」

一筆致啓上候、向寒之節御座候処、被成御揃愈御安康可被成御義珍重奉存候、随而小生義無異相動申候、乍憚此余御安慮可被成下候、当春来於駿府拜顔、寛々御物語致大慶奉存候、其砌彼是御厄介被成下義辱奉存候、其後書中御尋問も可申処、今猶多忙無申訊御疎縁罷過候段、不悪御海容可被成下候、扱追々江京御鎮静二相成、奥羽も次第二御平穩相趣候由、出兵之諸藩方段々御帰陣相成申候、御安慮可被成下候、右付来月初旬頃 大総督宮御帰京相成候趣、何れ御供上京ニ付而者路用其外甚以当惑罷在申候、就而者何共御氣之毒奉存候得共、右上京之節、尊宅江立寄申付、其節金子拾兩暫時御取替御借用申度、相済帰郷之上者元利共聊無相違御返納可被成候、定二無余義次第二而方今御掛談御頼、兼而申上

置候義ニ御座候、此段不悪御含置可被下候、誠ニ否之勤番ニ相成、何坎不都合万端御憐察可被成下候、上外其砌拜鳳之上、万縷可申尽候、右迄時候御見舞何坎之御礼且御頼兼為可得貴慮、如此御座候、早々頓首

十月廿二日

銚是登

原宿 庄司平五郎様

尚以随時御自愛可被成候旨専奉肝心候、乍末筆 皆々様方へも宜敷御伝言置奉頼候、呉々も本書令披見度御無心申候義ニ御座候、何卒之御含置御調達被下候様深奉希上候、万端其砌ニ申候積候、早々頓首

差出人の銚是登は大宮町（現富士宮市）の浅間神社の社人であり、大宮司富士亦八郎の配下として赤心隊に加わっていた。九月二〇日に江戸城西丸に鎮将府が開設され、赤心隊はその玄関に昼夜詰めることを命じられている。包紙に「西丸下赤心隊」と記されるのはそのためである。この手紙では、江戸も鎮静化し、奥羽の戦乱も収束し、来月初旬には大総督有栖川宮熾仁親王が帰京することになり、自分たちもお供をすることになるとの予定を伝え、ついでには上洛途中で原宿に立ち寄った際に路用として金一〇両を借用したいとの希望が述べられている。

東京に滞陣していた赤心隊四八名（四四名とも）・報国隊七四名は、鳥取・津和野などの諸藩兵とともに京都へ凱旋する大総督宮に供奉し、明治元年一月五日に出立した。一日には沼津宿で小休、原宿で昼食をとり、吉原宿に泊まった。一



庄司平五郎邸の鳥瞰図

『日本博覧図』所載

庄司家の豪商・大地主ぶりがうかがえる。ただし、この時の平五郎は2代目当主。

二日には赤心隊に対し御暇が言い渡され、隊員一同は「岩淵川原」まで一行を見送った。ただし、ここで暇が下されたのは大宮組だけであり、赤心隊のうち府辺組・山西組といった駿府近辺とその西の神官たちはまだ随行を続けたであろう。鑑是は岩淵から大宮にもどったと思われるので、庄司家で京都市の路銀を借りる必要はなかったのかもしれない。

赤心隊の兵站・資金担当か

書簡には鑑是と庄司は春に駿府で対面したと記されているので、赤心隊結成時に会う機会があったのであろう。そもそも赤心隊大宮組の名簿の末尾に記された庄司ら一〇名は、他の神官出身の隊員たちとは性格が異なったようである。残念ながら全員の素性を明らかにすることはできないが、判明した限りでは、普通の百姓・町人だったと思われる。

たとえば、望月隼人は和紙生産を行った庵原郡樽村（現静岡市）の人である。また、塩坂源右衛門は庵原郡蒲原宿（現静岡市）の米商で、年番名主・問屋役をつとめた人物であろう。数代前の同名の先祖は、暮を得意とした文人として『東海道人物志』にその名が掲載される。笠井恭蔵の名は、明治の大区小区制期に、第二大区（富士郡）三小区会議員として見出すことができる。渡辺利左衛門も、屋号を「木屋」といい質屋・米穀商を営み、名主・問屋などをつとめた蒲原宿の豪商で、同家一九代目当主（諱は守亮）のことと考えられる。佐野新蔵は、明治中期に刊行された人名録に富士郡袖野村上稲子（現富士宮市）で農業・製紙業を営む人物として名がある佐野新造と同一人物か。

庄司平五郎も「米屋平五郎」「原の米平」と呼ばれた、原宿の米穀商であり、醤油醸造も営んだらしい。当時は、屋号「カタバミヤ」を称した本家

庄司清右衛門家から分かれた初代平五郎（諱は宗孝、一八一五〜八一）の時であるが、同家は二代目平五郎、三代目松太郎、四代目一雄と続き、豪商・地主として成長し、三代・四代は県会議員や町長もつとめている。

どうやら一〇名は、庵原・富士・駿東郡の有力商人・農民だったのではないかと推測される。そうなるならば赤心隊のスポンサーとなつて、経済的に神官たちの草莽活動を支えたのであろう。鑑是が庄司に借金を申し込んでいるのもそのことを示している。

ただし、庄司家に伝来した書籍には平田篤胤著『祝詞正訓』（一八五八年刊）などが含まれていることから、自身も国学を学んだかもしれない。単なる「金蔓」ではなく、思想・信仰上においても真正銘の同志であった可能性もある。とはいえず、平五郎が神葬祭を採用し菩提寺から離れたような事実はなく、静養院光実日感居士の戒名で昌原寺に眠っている。

〔参考文献〕

- 『駿遠豆鑑』（一八九七年）、若林淳之「駿州赤心隊」（一九六八年、富士山本宮浅間神社社務所）、『明治維新静岡県勤皇義団事歴』（一九七三年、静岡県神社庁）、『報国蒼龍隊の壮挙 上の三』（一九八〇年、富士吉田市教育委員会）、高木俊輔「草莽諸隊員名簿について―東海道の報国隊・赤心隊・伊吹隊の場合―」（『人文科学論集』第一六号、一九八二年、信州大学人文学部）、『富士市史』下巻（一九六六年）、樋口雄彦「沼津掃苔録」（『沼津市博物館紀要』21、一九九七年）、『静岡県史 資料編』11・12・14・15、『東間門田中家・原庄司家文書目録』（二〇〇一年、沼津市明治史料館）、渡邊和子編『江戸時代の蒲原宿の記録 木屋江戸日記』（二〇一四年、三刷、私家版）

（樋口雄彦）

史料館からのお知らせ

開館 35 周年記念

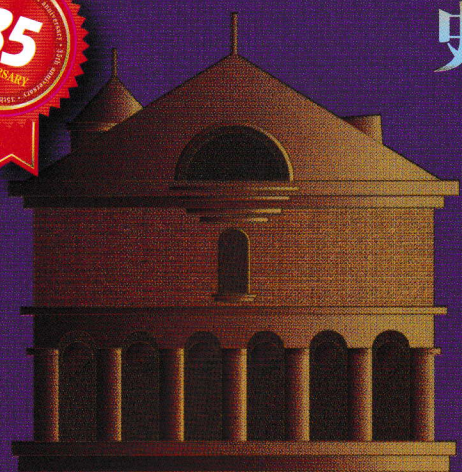
史料館の

半七半

平成31年2月2日(土)～3月24日(日)

企画展総選挙を行います！

あなたの清き一票をお待ちしてます。



新収資料の紹介



写真1

昨年未、当館の資料として仲間入りしました！一八六〇×九二〇×三四〇ミリメートル、推定重量約二トン！文句なしで最重量記録更新です！あまりの重さのため館内には入れられず、噴水の脇に鎮座しています。「明治三十七八年戦役記念」と彫られている大きな石板。これはかつて千本公園にあった「午砲台」のネームプレートです。(写真1)

沼津の午砲台は日露戦争の記念のために沼津本町の和伝太郎が工事委員となり、大阪砲兵工廠に製造を依頼、新式の砲が作られ、台とともに千本公園内の長谷寺の裏に設置されました。(写真2)

台に題字として入ったのがこの石です。揮毫したのは静岡に縁深い公爵徳川家達公、砲台共の総重量は十三万三千二百九十六貫(約五百トン)だったそうです。

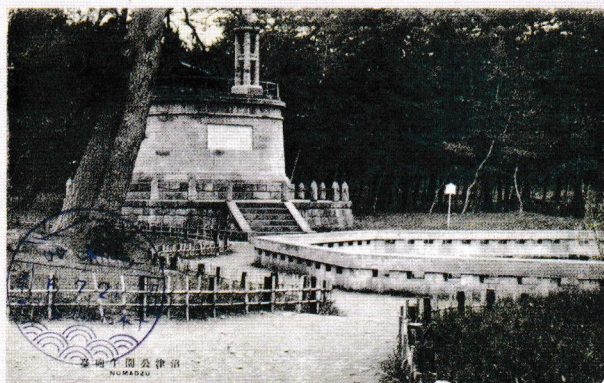


写真3

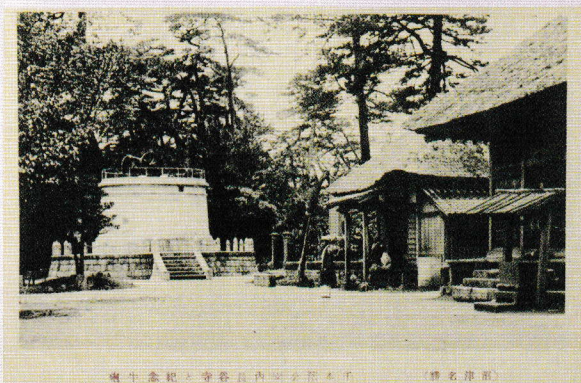


写真2

沼津市明治史料館通信

第136号

平成31年1月25日

編集・発行 沼津市明治史料館
〒410-0051 沼津市西熊堂372-1
TEL055-923-3335
FAX055-925-3018
印刷 みどり美術印刷株式会社



明治四四年(一九一)六月一日に落成式が挙行され、以後、正午を知らせる「午砲」として時を告げていました。ちなみに今では死語となつてしまった「半ドン」(半休)のドンはこの午砲を撃つたときの音が由来という説もあります。

大正一二年(一九二三)年七月一日に沼津町と楊原村が合併して沼津市が誕生すると、千本からでは午砲の音がよく聞こえなくなつてしまったので、翌年から市場町の八幡神社で花火を上げて午報することになりました。役目を終えた午砲は千本公園の通称八角池の脇に移されました。(写真3)

この午砲台の大砲は戦時中に出されたものと推測され、昭和四三年度から四六年度の千本公園整備事業において撤去されたと推測されます。なぜかこのプレートだけが残されたのですが、物理的にも歴史的にも埋もれそうになりながら、知る人ぞ知るといった感じで千本の地に残っていたところを、明治一五〇年のメモリアルイヤーの最後を飾る一大事業として文字通り「掘り起こして史料館に移設しました。」